

◆ 学士課程教育

《「地元論」、「相互理解連携論」、「ジェネラリズム看護論」の開講》

【実績】 「地元論」は1年生59人が履修登録を行った。前期の授業では自治体の職員から中核病院周辺の街づくり構想に関する説明を受けた後、グループ毎に「私たちが住みたいまちとは」のテーマで検討を行った。後期の授業では、地元で働くことの意義を考察させるため、県内で働く看護師、助産師、保健師から話を聞き、意見交換を行った。

「ジェネラリズム看護論」は2年生25人が履修登録を行ったほか、履修登録を行っていない3名が聴講生として参加した。前期は地方に暮らす人々の健康問題とニーズについて、看護師、社会福祉士・MSW 等複数の職種によるパネルディスカッション形式で講義を行った。後期は地方の小規模病院において地域で求められている看護活動の実際として、ジェネラリストナースと看護管理者からの実践活動報告の後、学生とのディスカッションを行った。

「相互理解連携論」は2年生45人が履修登録を行った。相互理解の基本である人の見方を理解するイメージ交換ゲーム、相手の気持ちを理解し自分の気持ちを表現する医療コミュニケーションを学ぶプレイバックシアターなどゲーム形式による演習を行った。プレイバックシアターにはフォローアップ研修受講者である小規模病院の看護師4人がファシリテーター役で参加した。

【成果】 3科目いずれも学内教員の他、非常勤講師を加え学生が参加型の教育方法により学生の学習を深めることができた。

学生の感想からは、「地元論」では、人が生活するとは何か、その生活をする場には何が必要かなどについて考察を深めていることが伺えた。また、「地元」について、学生がそれぞれ自分の言葉で表現できていたことから、「地元」の概念が理解できていると考える。「ジェネラリズム看護論」では、職種間において視点の類似と相違があることや多面的に捉える必要があることを学び、その中で看護が期待されるニーズの考察を深めていることが伺えた。又、医療資源の乏しい地域の中では地元住民の多様な健康問題に対して創造した看護活動を行い、様々な機関と協働連携することの重要性を理解できていると考える。なお、討議の際、人事交流事業に参加した看護師からの発言で、具体的な実践例をさらに理解できたと考える。「相互理解連携論」では、自分の考えを伝え、相手の考えや気持ちを理解することの重要性を学ぶことができたと考える。演習に参加した先輩看護師であるフォローアップ研修受講生は学生にとって看護職のロールモデルとなっていた。

【実施上のポイント】

- ・ 開講科目は選択科目なので、学生が履修する意欲を高めるようにシラバスに記載するとともに年度当初に具体的に案内を行い、履修学生を確保する。
- ・ 授業の一部に小規模病院看護師に参画してもらうなど、リカレント教育や人事交流事業と連携し小規模病院看護師の活動を学生に直接紹介する機会を設ける。

《リカレント教育修了生の小規模病院等で総合看護実習を開始》

【実績】 リカレント教育修了生のいる小規模病院等での総合看護実習では、成人慢性期と在宅の分野でそれぞれ学生が実習を行った。成人慢性期分野では、O病院とK病院で3人ずつ実習を行った。O病院では地域包括ケア病棟、一般病棟及び訪問看護、併設する老人保健施設に加え、病院で実施している「まちかど看護相談室」で実習した。K病院では病棟、併設する介護老人施設、グループホームに加え、訪問診療にも同行した。在宅分野では、T病院で1名が実習した。T病院は今まで本学を含めまったく実習を受け入れたことがない病院であったが、看護部とリカレント教育の修了生が協力して実習受け入れの準備を行ってくれ、実習学生がテーマとしている退院支援・地域連携を学ぶため、地域包括ケア病棟を中心に急性期病棟、訪問看護部門で実習し、リハビリテーションスタッフとの同行訪問も行った。又、地域包括支援センターとの事例検討の機会もあった。

【成果】 リカレント教育修了生のいる3つの小規模病院で実習を行うことが出来た。学生は看護師が医療施設から地域に出向き健康相談をしながらアセスメントしその場で健康教育を実施するという、地域住民の健康を保持増進する看護の役割を理解し、施設と在宅の連携と継続の実際の理解を深めた。又、規模は小規模ではあるが地域のニーズに合わせ多様な機能を果たして地域住民の健康を包括的に守っている医療機関の役割や、それらの機能の連続性、協働連携の実際を理解できた。小規模病院の活動を初めて知ったと言う感想を述べている学生もあり、地域における小規模病院の存在を学生に周知させる機会ともなった。

今回の実習の受け入れは、施設側からの意向が強かったものである。同施設の看護師はリカレント教育のほか人事交流事業にも参加しており、本学の教育課程や学生の理解度を理解したうえで、大学教員と共に実習内容を検討し、中心となって実習指導に当たってくれた。このことはリカレント教育や人事交流事業における成果が反映されたものと考えられる。

【実施上のポイント】

- ・ 実習施設を引き受けていただくためには、リカレント教育や人事交流等の事業を通して、ある程度時間をかけて、大学と施設と相互理解の上、実習環境を準備する。
- ・ 実習施設となる小規模病院等は大学から離れている施設が多いので、可能であればその地域の地元学生を配置できるように配慮する。又、その地域の出身学生でない場合、宿泊先やそこに掛かる経費を誰がどのように負担するかの検討が必要となる。
- ・ 小規模病院は大学から離れている施設が多いので、実習指導のための時間が多くなり教員の負担となる。ICTで学生や指導者と連携することが効果的である。